

# 生剛遺跡出土の遺物について

山川 陽子・中山加代子・沢崎 正則  
泉 幸平・森 真悟・福本 悅子

(浦幌高校郷土研究部)

## I 発見までの過程

生剛遺跡は、1968年浦幌高校郷土研究部の佐藤芳雄、谷向茂の両先輩が、遺跡パトロール中に、浦幌町役場が砂利取りをしている砂利採取場で発見した。

その後二人は、浦幌高校郷土研究部の顧問であった堀野昭氏に連絡して、浦幌町役場に砂利取りの中止を申し込んだ。その後、1971年浦幌高校郷土研究部が、一般調査を行い、1973年、再び町によって砂利取りが再開され、一部破壊されたが再び砂利取りが中止された。ここに公表する資料は1971年浦幌高校郷土研究部が、一般調査を行った

時の遺物である。

(山川陽子)

## II 位置、地形 (Fig. 1)

生剛遺跡は、浦幌町字生剛49、50番地に所在する、浦幌川によって作られた河岸段丘の標高10m～20mの平坦な面にある。遺跡の東側には、沼に通じている小川が北から南に流れしており、西側には、浦幌新川が北から南へ流れ、段丘の先端近くで東に向って流れている。遺跡の北側にある砂利取り場が現在遺跡の北部まで延びている。

(山川陽子)

## III 出土遺物について

出土遺物は、土器および石器である。以下それの説明をする。

### 1. 土器について

土器は、その特徴より次の6群に分類が可能である。

#### 第I群 (Fig. 2-1～11)

本群は、貝殻条痕文と腹縁文とからなっているグループであるが、文様から2類に分けられる。

#### 第1類 (Fig. 2-1, 6, 7, 11)

本類は、貝殻腹縁文のグループからなる。1は口縁部破片で、口唇部近くに貝殻腹縁文がつけられている。土器の厚さは、3mm～7mmぐらいで、上方へ行くにしたがって、薄くなっている。条痕文は横向きの線になっている。口唇部の形は先が丸くなっている。色は表が茶褐色であり、裏は黒褐色である。土器の破片には、礫が含まれているが、繊維は、含まれていない。6は、土器の厚さは5mmぐらいである。口唇部は、波状を呈しており貝殻腹縁文と頂点から垂下する列点文が、施文されている。7と11は貝殻腹縁文が、施文されている胴部破片である。

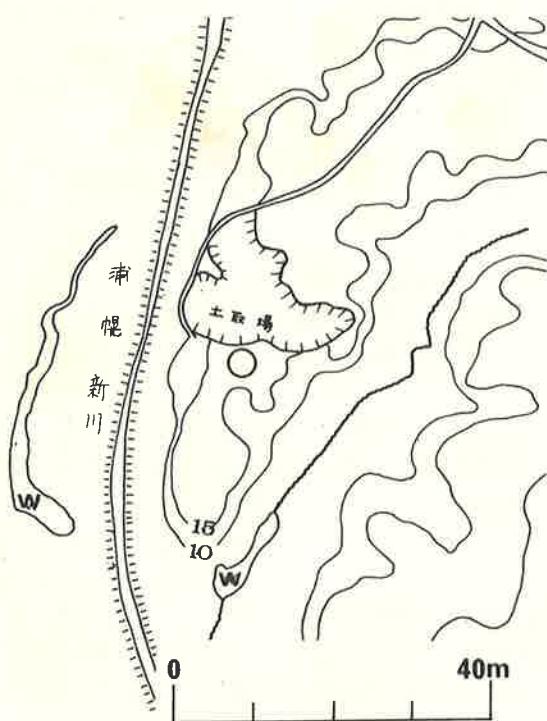


Fig. 1 生剛遺跡附近地形図

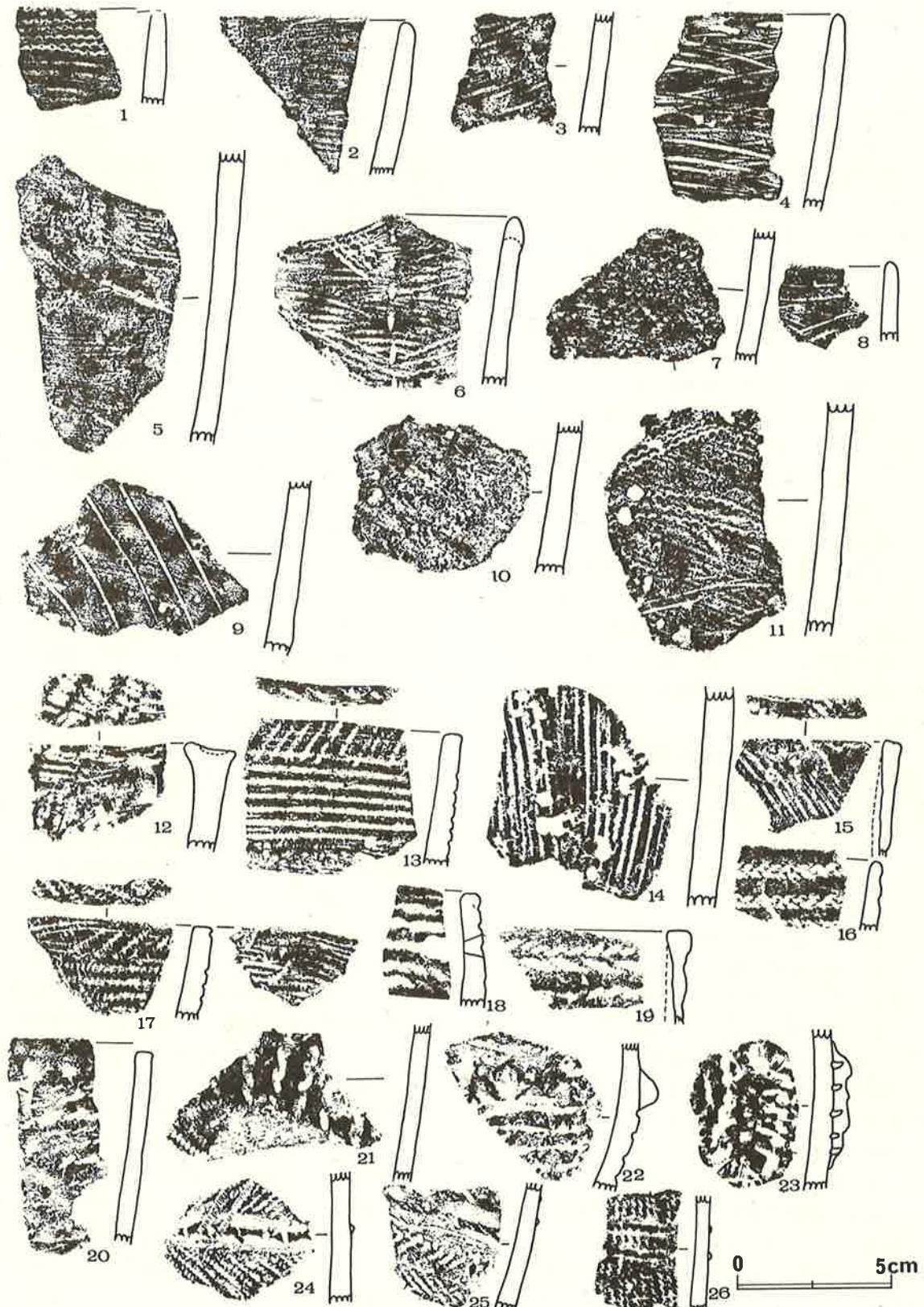


Fig. 2 生剛遺跡出土の土器拓影図

## 第2類 (Fig. 2-2~5・8~10)

第2類土器は、貝殻条痕文をおもに施文しているグループである。2・3・5は、貝殻条痕文が横位に施されており、9はその上にヘラ描沈線文が、施されている。10は無文に近い。

## 第II群土器 (Fig. 2-12・14・15)

12は、平らな口唇であってその上に太めの絡条体圧痕文が、施され口唇部近くでは、横位にその下部では、斜位方向に集合沈線文が施されている。15も同様であるが、横位の集合沈線文を欠いている。14は、胴部破片で縦位の集合沈線文が施されている。

## 第III群土器 (Fig. 2-13・17)

本群は、絡条体圧痕文が単独に施文されているグループで、文様は口唇部にまでもおよんでいる。17は、堅い撫りの絡条体をもちいたらしく、裏面には横位の条痕文が、施文されている。

## 第IV群 (Fig. 2-16・18~23)

本群は、組紐圧痕文・撫糸圧痕文等を特徴としているグループである。本群土器は、さらにその特徴から2類に分けられる。

## 第1類 (Fig. 2-16・18~21)

本類は、組紐圧痕文と撫糸圧痕文のみによって施文されているものであって、16は、組紐圧痕文で施文されている土器口縁部の破片である。表面の色調は黒褐色を呈し胎土に小礫がごく少量含まれている。19も同様の破片である。18・20には撫糸圧痕文が施されており、21は短縄文が特徴である。

## 第2類 (Fig. 2-22・23)

本類は、第1類の特徴に隆起帯を加えたものである。22は撫糸圧痕文を地文として横位に隆起帯をめぐらしその頂点を指でおしつけたものである。

## 第V群土器 (Fig. 2-24~26)

本群は、縄文と微隆起帯もしくは撫糸圧痕文と微隆起帯を特徴としたものであり、縄文の一部は微隆起帯の上にまで及んでいるものもある。その特徴から2類に分類した。

## 第1類土器 (Fig. 2-24・25)

縄文と微隆起をもつもので三角形断面の微隆起帯には、きざみ目をつけるものがある。24がそれであるが地文から微隆起帯にかけて斜位方向の絡条体圧痕文が2条みられる。25も同様の破片であるが微隆起帯上にまでも縄文が施されている。

## 第2類土器 (Fig. 2-26)

26は、1片だけである。撫糸圧痕文と微隆起帯をもつものである。

## 第VI群土器

図示していないが、北筒式土器の胴部破片で、羽縄文が施され胎土には若干の小礫を含んでいる  
(中山加代子・沢崎正則)

## 2. 石器について

## 石鎌 (Fig. 3-1~3)

1は重さ1.04gの有茎鎌で頭部は厚くて短いが基部は頭部にくらべ薄くてやや長く全縁にわたって押圧剝離が施されている。2は先端部が破損しているが重さ0.53gの無茎の石鎌で中央部はややふくらみがあり副部に行くに従って厚さがましている。3の側縁にはえぐり込みがあり、中央部はふくらみがある。茎部に行くにつれて細くなっている。1~3とも石質は黒曜石であり、1と3は原石面を残している。

## 石槍 (Fig. 3-4~6)

4から6は石槍である。先端部は破損しており4と5は柳葉形と見られ押圧剝離が施され6の茎部はまるみがあり4・5と同じく押圧剝離が施されている。

## スクレイパー (Fig. 3-7~13)

7の茎部はまるみがあり先端部がとがっていて厚さは、ほぼ同じである。両面とも全縁にわたり押圧剝離が施されている。8と9は粗雑なスクレイパーである。9は片側に粗雑な剝離が施されやや断面三角形をしている。10は先端部のとんがりがなく茎部に行くに従ってサイドがまるみをおびながらえぐり込みが入って全縁に押圧剝離が施されている。11~13は縦長剥片に刃をつけたサイドスクレイパーで11は先端部から茎部にかけての厚さがほぼ同じで、サイドには押圧剝離が施されているが、一部に原石面を残している。12と13は先端部が破損している。

## 石斧 (Fig. 3-14・15)

14は基部が破損しており石質は緑泥岩で擦切痕は縦位の方向に施され、中間部は斜位の方向に擦痕が残され、刃部も斜位の方向に擦痕が残されている。15は刃部と基部の大部分が破損しており刃部の上の方は斜位の方向に擦痕が残されている。

## 石錐 (Fig. 3-16~20)

16は扁平な河原石で重さ76.10gである。17はほ

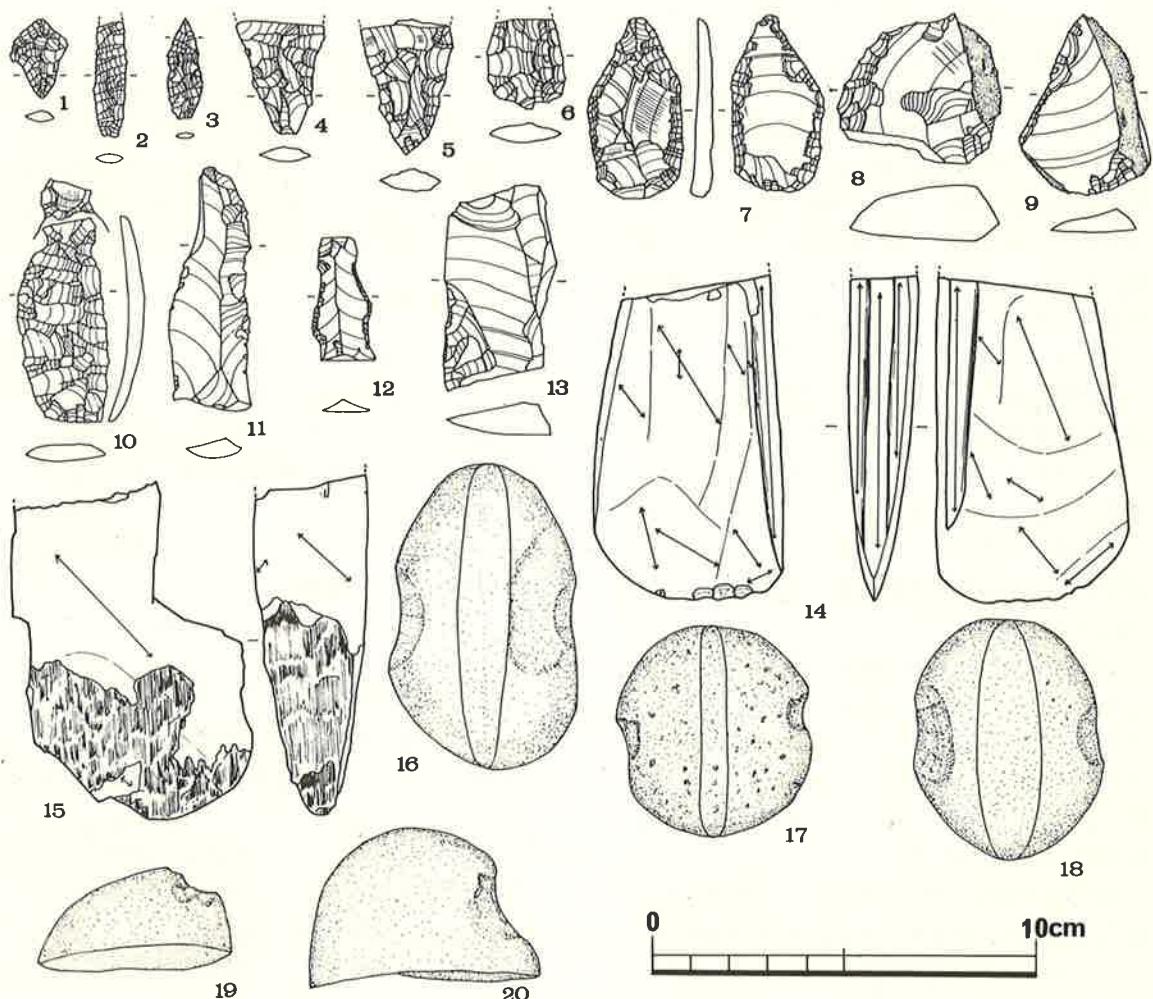


Fig. 3 生剛遺跡出土の石器実測図

ほぼ円形で薄く重さ33.25gであり両端を打ちかいてある。18は17とほぼ同じで形は楕円形で重さ77.57gである。19、20は破損している残存部分の重さは25.26gと61.28gで両者とも両側から打ちかいてある。これらの石質は砂岩で作られている。これらの石錐は、20の不明なものを除いて河原石の短軸方向を打ち欠いているという共通点がある。

(泉 幸平・森 真悟)

#### IV まとめ

IIIにおいて、土器及び石器の特徴を述べて来ました。これらの土器及び石器の多くは、縄文早期に比定されるものと考えられます。これらについて、土器と石器について考えてみたいと思います

#### 1. 土器について

第Ⅰ群土器は、貝殻腹縁文及び貝殻条痕文をもつことから沼尻式に比定されるでしょう。沼尻式<sup>①</sup>土器は、浦幌町では、平和遺跡、共栄遺跡A地点<sup>②</sup>吉野遺跡、統太遺跡などで出土していますけれど沼尻遺跡で出土した沼尻式土器の文様のうち貝殻腹縁文を欠くものが多く、生剛遺跡のこの資料は特徴的なものと言えるでしょう。平和遺跡の第5号住居跡出土の上器の中に貝殻腹縁文をもったものがありますが、これが浦幌町における貝殻腹縁文の唯一のものでした。十勝地域のその他の出土例は明らかではありません。

第Ⅱ群土器は、口唇部に絡条体圧痕文が施文されていて口縁部から胴部にかけて横位ないし斜位方向に集合沈線文のあるグループです。Fig. 2 —

12・15は、口唇部が平坦であり、そこに縦条体圧痕文が施文されている特意なものです。本群土器は、テンネル式土器に比定されるものと考えますけれど、このような土器は、十勝地方では曉遺跡<sup>⑥</sup>平和遺跡、<sup>②</sup>十勝太若月遺跡、<sup>⑥</sup>中島遺跡、<sup>⑨</sup>下音更遺跡、<sup>⑨</sup>大津灯台遺跡、<sup>⑨</sup>八千代遺跡で出土しているようです。本群土器は、縦条体圧痕文という「縄原体」が使用されて施文されているため縄文早期条痕文・貝殻文・無文土器群に後続するものと考えられます。

第Ⅲ群土器は、口唇部および口縁文に、極く繊細な縦条体圧痕文が、単独に施文されていることから、浦幌式土器に比定されるものと考えます。浦幌式土器は、通常石刃鎌と伴うことが知られていますが、本遺跡では未検出です。本群土器は、<sup>⑩</sup>浦幌町内では浦幌新吉野台細石器遺跡と共栄遺跡<sup>⑪</sup>B地点で出土したことが報じられています。

第Ⅳ群土器は、組紐圧痕文・撚糸文等をもっていることから東釧路Ⅲ式土器に比定されるものと思われます。ただ、Fig. 2-22・23に見られる垂下する隆起帯は、東釧路Ⅲ式の一般的な特徴ではありませんが、撚糸圧痕文をもっていることから本群の仲間としました。

第Ⅴ群土器は、断面三角形の微隆起帯をもち、地文に羽状縄文や撚糸圧痕文、縦条体圧痕文をもつことから中茶路式のグループと思われます。本群土器は、かって下大樹遺跡の第4地点から出土<sup>⑫</sup>したことが報告されています。

第Ⅵ群土器は、図示していませんけれど、北筒式土器の胴部破片と考えられるものです。

## 2. 石器について

石器は、全部で20点である。Fig. 3-1~3は石鎌で1は先端部が大きく、特異な形をしている<sup>⑬</sup>2は、いわゆる田原式石鎌と言われる物であろうと考えられるが、もしそうであれば、本遺跡の第Ⅳ群土器に伴出する物と考えられる。3も同様の形をしている。4~6の石槍は先端部を欠損しているが4・5の形態は縄文早期の土器に伴出することが知られている。7~13はスクレイパーである。7は、先端部が尖がつけており、ポイントと分類することも可能であるが、一応スクレイパーに分類した。8・9は粗雑な、石片に剝離をほどこしたものである。10はつまみのあるものである。11~13は、縦長の剝片に刃をつけたサイドスクレ

イバーである。14は、擦切磨製石斧で、縄文早期の土器片に伴出することが知られている。15は磨製石斧でその形態から第Ⅵ群土器に伴出するものと思われる。16~20は石錐で19を除いては短軸方向に打ちかいてある。これらの石錐は縄文早期の土器群、特に貝殻文、条痕文、無文土器群に多量に伴出することが知られている。(福本悦子)

## V おわりに

以上、生剛遺跡の出土遺物について、その概要を述べて来ましたが、第Ⅵ群土器を除いてはいずれも縄文早期に比定されるものであり、道東においても非常に質の高い遺跡と思われます。最後に石器の実測をしていただいた立正大学の佐藤訓敏氏と指導していただいた河村七五三喜氏と元顧問の堀野昭先生にお礼申し上げたいと思います。

(福本悦子)

## 引用文献

- ①沢四郎・西幸隆「北海道釧路市沼尻遺跡の出土遺物について」(『釧路市立郷土博物館紀要』2) 1973
- ②浦幌町教育委員会『平和遺跡 — 浦幌町平和遺跡発掘調査報告書 —』1971
- ③浦幌町立郷土博物館の所蔵資料による。
- ④大場利夫・後藤秀彦「浦幌町吉野遺跡」(『日本考古学年報』24) 1973
- ⑤河村七五三喜・佐藤訓敏氏のご教示による。
- ⑥沢四郎「北海道釧路村テンネル第1地点出土の土器について」(『釧路の古代文化』6) 1964
- ⑦明石博志「曉遺跡 — 帯広市曉台地遺跡調査報告 —」(『郷土十勝』5) 1965
- ⑧石橋次雄・木村方一・後藤秀彦『十勝太若月 — 第二次発掘調査 —』1974
- ⑨明石博志・佐藤訓敏「曉式土器文化の新資料」(『郷土十勝』10) 1973
- ⑩名取武光「北海道浦幌村吉野台遺跡」(『日本考古学年報』3) 1955
- ⑪後藤秀彦「共栄遺跡B地点出土の土器について」(『浦幌町郷土博物館報告』4) 1973
- ⑫富水慶一・沢四郎「中茶路遺跡」(『北海道白糠町の先史文化』1) 1966
- ⑬大場利夫・棚瀬善一『大樹遺跡』1965
- ⑭中田幹雄他『日高の文化財』1 1967